

マルコ14章1-31節 「裏切りとつまずき」

1A ユダの裏切り 1-11

1B 殺す方法を探す指導者ら 1-2

2B 高価な献身 3-9

3B 金による裏切り 10-11

2A 過越の食事 12-26

1B すべてを用意されるイエス 12-17

2B 親しい者の裏切り 18-21

3B 身代わりの死の契約 22-26

3A 弟子たちのつまずき 27-31

本文

マルコによる福音書 14 章を開いてください。私たちは受難の季節に入っています。イエス様が十字架上で死なれるまで受けられた苦みの道を辿ります。14 章と 15 章に書き記されていますが、今から 14 章の前半 1-31 節を見て行きたいと思います。

イエス様がエルサレムに入城された日は、日曜日でした。ナツメヤシの木の枝でろばの子に乗られたイエス様を歓喜して人々が迎え入れました。棕櫚の聖日と呼ばれます。それから次の日、月曜日にイエス様は再び宮に入られて、宮清めを行われました。そして次の日、水曜日に、宗教指導者らがやって来て、イエス様を誘導尋問的な詰問をします。その度にイエス様は驚くような的確な回答をされて、逆に彼らがイエス様から質問されることになりました。そして宮から出て行く時に、イエス様がこの神殿が崩れてしまうことを予告され、終わりの日についてオリブ山からお語りになられました。それが 13 章です。そして 14 章に入ります。

1A ユダの裏切り 1-11

1B 殺す方法を探す指導者ら 1-2

1 過越の祭り、すなわち種なしパンの祭りが二日後に迫っていた。祭司長たちと律法学者たちは、イエスをだまして捕らえ、殺すための良い方法を探していた。2 彼らは、「祭りの間はやめておこう。民が騒ぎを起こすといけない」と話していた。

過越の祭りは、イスラエルの民がエジプトから神の力強い手によって救い出され、神の民となったことをお祝いする日であります。イスラエル民族の始まりを記念する祝いであり、今に至るまでユダヤ人はこの祝いを私たちの正月のように大きく祝います。二日後に迫っていたとありますが、それは水曜日のことですね。世界中からユダヤ人がこの祭りを祝うためにやってきています。エル

サレムは人々でごった返しています。

過越の祭りに行くことは、出エジプト記 12 章に詳しく書いてあります。小羊を屠って、その血を家の鴨居と門柱につけて、その家の中で苦菜と、種なしパンと、それから小羊を焼いて食べます。そして、その夜に主がその家を過ぎ越されて、エジプトの初めに生まれた男の子、長子が、神の怒りのゆえに殺されるけれども、その怒りはその家の入口にあてがわれた血を神がご覧になることによって、過ぎ越す、ということです。流された血を見ることによって、神が本来、下す怒りを見過ごすということは、ご自身の子キリストが流された血によって、その血を見て、罪に対する怒りをスゴ越されるということを表しているのです。

ユダヤ人にとって、過越の祭りは自分たちの民族の解放の時であり、また誕生の時でもありました。自分たちが自由にされた時でありました。それゆえ、ユダヤ人がローマに支配されている中で、その溜まっている反ローマ感情も噴出しやすく、ローマはいつもにも増して監視する兵を増やします。神殿の敷地の北側に隣接して、アントニオ要塞を作り、そこから神殿を一望できるようにしていました。そしてローマ総督は、ユダヤ属州の首府カイサリアからエルサレムにやって来て、ヘロデの建てた宮殿を使って訪問していました。

ですから、ユダヤ人がとても感情的に高揚する時であり、民族意識が強められる時であると同時に、ローマとの衝突も起こってしまうのではないかと思われる緊張する時でもありました。ただでさえ緊張する時なのに、ここで、予てからイエスを殺そうと置いていろいろな誘導尋問をしていた祭司長と律法学者たちは、祭りの間だけはやめておこうと思ったのです。どんな方法がよいか、思いあぐねていましたが、時期は過越の祭りの時はやめておこうとしたのです。

ところが、これからの話で分かりますが、まさに過越の祭りの時期にイエス様がローマ総督ピラトによって十字架刑を受け、死刑に処せられるのです。裏切るイスカリオテのユダが、まさに過越の食事の時に席を立て、指導者らに居場所を特定させ、その居場所が分かったのであれば、すぐに捕えて、裁判にかけないといけないうことになり、結局、過越の祭りの日にローマ総督に訴え出なければいけなくなったのです。彼らは謀議をしますが、すべてのことは神のご計画のままに進んでいたのです。つまり、神がご自分の子キリストが、イスラエルを救い、また、全人類の罪の供え物となるように定めておられたのです。

2B 高価な献身 3-9

そして、イエス様を捕えて殺すことのできなかつた宗教指導者らが、どうして捕らえることができたのか？人類、最大のスキャンダルが起こります。最も近しくしていた仲間の十二弟子の中から裏切りが起こり、また彼らが見捨てたからこそそうなったのです。しかし、そこに美しい話が挿入されています。それが一人の女が、イエス様が間もなく死なれることを思って、高価な香油を注いだ

ことです。

3 さて、イエスがベタニアで、ツアラアトに冒された人シモンのおられたときのことである。食事をしておられると、ある女の人が、純粋で非常に高価なナルド油の入った小さな壺を持って来て、その壺を割り、イエスの頭に注いだ。4 すると、何人かの者が憤慨して互いに言った。「何のために、香油をこんなに無駄にしたのか。5 この香油なら、三百デナリ以上に売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」そして、彼女を厳しく責めた。

午前礼拝で話したように、これはヨハネ 12 章と同じ出来事だと思います。過越の祭りから六日前とありますから、二日前ではなく六日前の出来事かもしれません。けれどもマルコが敢えてここに挿入させているのは、これから起こる弟子たちの裏切りと対比させているのです。敢えて名前をマルコが記していないこの女、実際はおそらくマルタとラザロの姉妹マリアなのですが、信仰と愛の献身の姿を見せています。

6 すると、イエスは言われた。「彼女を、するまみにさせておきなさい。なぜ困らせるのですか。わたしのために、良いことをしてくれたのです。7 貧しい人々は、いつもあなたがたと一緒にいます。あなたがたは望むとき、いつでも彼らに良いことをしてあげられます。しかし、わたしは、いつもあなたがたと一緒にいるわけではありません。8 彼女は、自分にできることをしたのです。埋葬に備えて、わたしのからだに、前もって香油を塗ってくれました。9 まことに、あなたがたに言います。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられるところでは、この人がしたことも、この人の記念として語られます。」

もしイエス様が、このように取り上げられなかったら、マルコもマタイも、そしてヨハネもこの出来事を取り上げなかったでしょう。そして福音書に記録されていませんから、彼女の行為はなんか、とんでもない無駄をした失礼な行為として投げ捨てられたかもしれません。イエス様は、このような方です。私たちの目にはどんなに小さく見えても、そこにある愛と信仰と犠牲、こういったものを見て、それをご自分の福音のためにお用いになられているのです。

3B 金による裏切り 10-11

10 さて、十二人の一人であるイスカリオテのユダは、祭司長たちのところへ行った。イエスを引き渡すためであった。11 彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。そこでユダは、どうすればイエスをうまく引き渡せるかと、その機をうかがっていた。

1 節にある「イエスをだまして捕らえ、殺すための良い方法を探していた」に続く話です。良い方法を探していたその時に、イスカリオテのユダが内通者になることを申し出たのです。そして、今度は彼自身が、どのようにすればイエスを引き渡せるかと、その機を伺うこととなります。彼がい

なかったら、いつまでも祭司長たちはイエスを捕らえることはできなかったのです。まさに、十二弟子の一人によって、十字架が引き起こされたといっても過言ではありません。もちろん、神のご計画の内なのですが、それでもユダがこのようなことをしなければイエス殺害の計画は実行されなかったのです。

彼らはユダに金を与える約束をしました。イスカリオテのユダがなぜ、イエスを引き渡すように裏切ったのか？マルコは、敢えて先の香油を注ぐ話を挿入させているところに、推測ができると思います。三百デナリで売ることのできる香油を無駄に使ったという弟子たちの非難を、イエス様が擁護されたことです。「貪欲」は明らかにあったでしょう。ヨハネ 12 章には、イスカリオテのユダがお金を管理していて、横領していたことが書かれています。そして、うぬぼれもあったのかもしれないでしょう。女を擁護するイエス様に対して、恨みや憤りを感じたのかもしれませんが、そして、失望もあったのかもしれませんが、なぜ、こんな小さな者、女が、福音が広がる所で彼女も覚えられるのか？イエスの考えていることがさっぱり分からないということが、まさに損得勘定や計算で生きてきたユダには理解が出来なかったのでしょうか。

主の愛を心から受け入れていなかったからこそ、近くにいたのに裏切り行為に走ったのではないか？と思われます。ヨハネ 13 章には、イエス様が最後の晩餐において、最後まで愛された場面が出て来ます。弟子たちの足を洗われたのです。そして、イエス様は「ヨハ 13:10 水浴した者は、足以外は洗う必要はありません。全身がきよいのです。あまたがたはきよいのですが、みながきよいわけではありません。」と言われました。愛をとことんまで示された、その仕える、へりくだられるイエス様の姿に、自分は付いていけなかったのかもしれませんが、そして、自分の心にある悪をそのまま主に持ってくることをしないままだったので、近くにいたのに心の中は反発やうぬぼれ、貪りに満たされてしまったのだと思います。そしてヨハネ 13 章には、そこにサタンがユダの心に入ったとあります。彼は、イエスの愛を受け入れず、それゆえ心を神に従わせることができませんでした。

2A 過越の食事 12-26

1B すべてを用意されるイエス 12-17

12 種なしパンの祭りの最初の日、すなわち、過越の子羊を屠る日、弟子たちはイエスに言った。「過越の食事ができるように、私たちは、どこへ行って用意をしましょうか。」

イエス様は、弟子たちと共に過ごす最後の晩餐です。「種なしパンの祭りの最初の日、すなわち、過越の子羊を屠る日」とあります。子羊を屠るのは、第一の月、ニサンの月の十四日と出エジプト記 12 章にあります。そして小羊を屠って、日没になり、食事をします。その時にはすでに十五日です。ユダヤ人は、今もそうですが、イスラエルでは日没によって日が始まるとしています。夜から一日が始まるのです。そして、「種なしパンの祭り」であります。その日没が来てからの食事の時に、種なしパンと苦菜を添えて食べ、子羊を焼いて食べます。その時から七日間、種なしパンの祝い

が持たれます。ただ、ここに「最初の日」とありますが、この全体の八日間の祝いを「種なしパンの祭り」とも言うそうです。

パン種、すなわちイースト菌とは、罪や悪を象徴しています。パリサイ人やヘロデ党のパン種に気を付けなさいとイエス様が言われたことがあります。それは粉全体に広まりますから、罪が教会の中に入ってそれで全体に広がって行くものなのだとことをパウロが、コリント第一 5 章で話したことがあります(5:6-8)。そのパン種がないとは、罪が取り除かれていることを示しています。七日間、それを守るということは、七は神の完全数ですから、神が完全に罪を取り除かれたことを示しています。過越の祭りがキリストの流された血を表しているならば、種なしパンの祝いは、その血によって全ての罪が取り除かれたことを表しています。ですから、イエス様がこの時を、弟子たちと最後の食事をする時を心待ちにしていたのです。

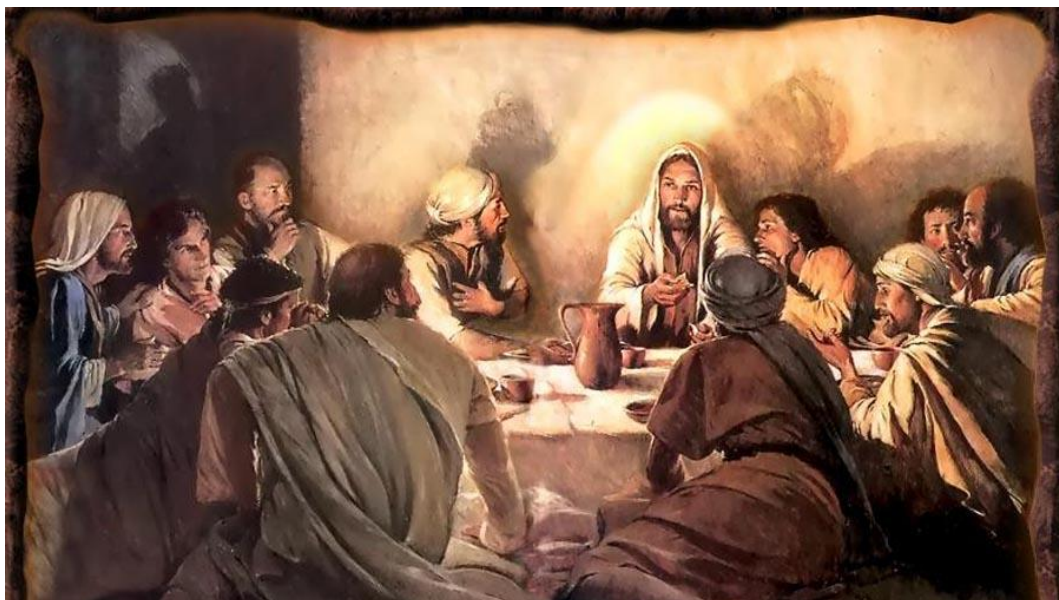
弟子たちは、「過越の食事ができるように、私たちは、どこへ行って用意をしましょうか。」と言っていますが、そこには期待感が込められています。エルサレムには世界中からのユダヤ人がやってきています。エルサレムはごった返して、その周辺には広大なテント村ができていました。町は混雑しているので、その中で食事をする場所を見つけるのは容易ではありません。それで多くの人たちはテントの中で過越の食事をしていたほどです。そこで、どこに行き行って用意をしましょうかと尋ねています。

13 イエスは、こう言って弟子のうち二人を遣わされた。「都に入りなさい。すると、水がめを運んでいる人に出会います。その人について行きなさい。14 そして、彼が入って行く家の主人に、『弟子たちと一緒に過越の食事をする、わたしの客間はどこかと先生が言っております』と言いなさい。15 すると、その主人自ら、席が整えられて用意のできた二階の大広間を見せてくれます。そこでわたしたちのために用意をしなさい。」16 弟子たちが出かけ行って都に入ると、イエスが彼らに言われたとおりであった。それで、彼らは過越の用意をした。17 夕方になって、イエスは十二人と一緒にそこに来られた。

イエス様は、エルサレムに入城される時も、このように詳細に誰に会うか、何があるかを予知されて、そのことに基づいて入場の準備をさせました。ここでも同じように、收拾の付かないような混雑した状況の中で、それでも静かに最後の晩餐をすることのできる場を設けられました。イスカリオテのユダが内通しないように、彼には分らない形で場所を選ばれた可能性もあります。都に入ったら、「水がめを運んでいる人に出会います」と言われますが、ここは「男」です。水がめを担いでいるのは大抵、女性ですから、これはすぐに目に付きます。そして、その家の主人は、イエス様の弟子の一人なのでしょう、イエス様のことを話したらすぐに客間を用意してくれます。

そして、「二階の大広間」とあります。私たちはしばしば、十二人だけの食事を思い浮かべます

が、大勢の女の人もイエス様に付いてきていますし、他の弟子たちも付いてきていることでしょう。子供たちもいたかもしれません。過越の食事は、子供が父に質問するなど、家庭での儀式になっていますから、子供も女もいるのです。十二人がイエス様の周りにコの字に座って、ゆったりと寝そべって座ったことでしょう。当時の過越の祭りは、テーブルと椅子という形ではなく、コの字になったお膳のようなものでした。



2B 親しい者の裏切り 18-21

18 そして、彼らが席に着いて食事をしているとき、イエスは言われた。「まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうち一人で、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ります。」
19 弟子たちは悲しくなり、次々にイエスに言い始めた。「まさか私ではないでしょう。」
20 イエスは言われた。「十二人の一人で、わたしと一緒に手を鉢に浸している者です。
21 人の子は、自分について書かれているとおり、去って行きます。しかし、人の子を裏切るその人はわざわいです。そういう人は、生まれて来なければよかったのです。」

イエス様は、イスカリオテのユダが裏切られることを初めから知っておられました。そして食事の席に着いている時に、このことを明かされました。食事をしている時、ということが味噌です。先ほども、食事をしている時に女が香油をイエス様の頭に注ぎました。そして弟子たちが激しく憤ったのですが、イエス様の心はどれほどまでに和んだことでしょうか。彼女の愛の行為は、イエス様がこれからなされようとしていたことと完全に調和していたのです。その女は”空気が読めない”と弟子たちは思っていたのですが、むしろ、イエス様の心を見失っていたのは弟子たちでした。

そして今、この食事の席において、最も親しく交わっているはずの食事の場において裏切るものが出て来るとイエス様は宣言されたのです。イスカリオテのユダのことを預言したダビデの言葉が詩篇 41 篇に残っていますが、「41:9 私が信頼した親しい友が 私のパンを食べている者までが

私に向ってかかとを上げます。」とあります。共にパンを食べているということによって、そのパンを同じ体の中に入れていたのですから、それで一体感ができます。その食事の場で、裏切りを思い巡らしていたということは、本当に悲惨なことです。

弟子たちは、悲しくなり「まさか私ではないでしょう。」と互いに言っています。(先に、ここには十二人以外にも弟子たちがいるだろうと言いましたが、ここは十二人以上いることを示唆している箇所です。)あれだけ女に対しては激しく憤った弟子たちは、実は自信のない男たちでした。ある時に自分たちが主のそばにいたのだとして強く主張している者たちは、その心の奥には自分がイエス様を裏切ってしまうのではないかという後ろめたさみたいなものがあったのです。イエス様は、誓ってはならないと戒められたことがありましたが、誓うことの裏にはそれだけ自信がないことを示しています。そういうところを私たちは一人一人が通らなければいけないでしょう。イエス様の愛を本当に受けていない心の部分がある。その心をイエス様に明け渡しておらず、一生懸命イエス様について行っているけれども、どこかに後ろめたさがある。それで、香油を注いだ女のような愛と献身の姿を見ると、思わず強く反応してしまう。本物を見せられる時に、自分の心が見せられてしまうからです。

それでイエス様は、「十二人の一人で、わたしと一緒に手を鉢に浸している者です。」と言われていきます。ところで、過越の食事は手順にしたがって行われます。食事をセダーと呼び、その式次第をハガダーと呼びました。初めに蠟燭を点火し祈りを捧げます。父親が子供を祝福し、そして第一の杯が回されます。食事の中では、合計、四回、杯を交わします。第一の杯は感謝の杯と呼ばれます。第二は裁き、第三は贖い、そして第四は賛美の杯です。第一の杯の後に、水で指を洗いますが、この時にヨハネ福音書 13 章の、イエス様の足洗いがあったのでしょうか。そして第二の杯、裁きの杯を飲みます。これは、主がエジプトに裁きを行われたことを記念するものです。それから、苦菜を塩水に浸して食べるのですが、これはエジプトの奴隷生活で汗水を流した辛さを思い出すものです。その塩水の鉢に苦菜を浸しますが、2-3 人が一つの鉢と使っていたので、ユダとイエス様が同じ鉢に浸していたと考えられます。ここまで、近い間柄だった、同じ鉢を使っていたほど一体感をもって接したのに、それでも根本のところではイエス様の思いを受けとめていなかった、その愛を受け入れていなかったのです。

3B 身代わりの死の契約 22-26

そしてヨハネ 13 章によると、この後でイスカリオテのユダにサタンが入り、すぐに出て行きました。そうです、彼は次の、イエス様の定められた聖餐にあずかることはできなかったのです。彼は、弟子たちの仲間のふりをしていましたが、実は仲間ではなかった。そういった者は、このように親しい交わり、本質的な、霊的な交わりからは自ずと出て行くことになります。

22 さて、一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、神をほめたたえてこれを裂き、弟子た

ちに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしのからだです。」

私たちは聖餐式では、パンとぶどう酒をそのまま連続で受け取って食べ、飲んでいますが、これらは三時間ぐらい続く、過越の祭りの一番にしか過ぎません。

先ほどの苦菜を塩水に浸す儀式の後に、「アフィコーメン」と呼ばれるパンを食べます。三つの部分に分かれた布袋に、それぞれ三枚の種無しパンを入れます。そして真ん中のパンを引き出し、それを二つに裂きます。その半分を麻布にくるんで隠します。なんでそんなことをするのですか？と尋ねても、ユダヤ人の人は答えることができません。イエス様を信じているユダヤ人は答えることができます。三つのパンは、父、子、聖霊を表しています。その真ん中、御子のパンだけが裂かれます。そして、麻布にくるむのは、イエス様が裂かれて死なれてから、墓に葬られる姿です。そして、そのパン、マツツアにも、キリストの姿が出ています。いつも、皆さんが聖餐式で食べているパンです。あそこには、二つの特徴があって、一つは筋ができています。もう一つは穴があることです。イエス様の肉体を示しています。むちで打たれて体に筋ができています。そして釘が打たれて、穴ができています。

そして、ハロセットと呼ばれるものを食べます。これは、りんご、ナッツ、干しぶどうなどを蜂蜜とグレープジュースで混ぜた甘い物です。これを、マロールと呼ばれる赤いわさびを擦ったものを食べます。ものすごい辛いですが、ハロセットをすぐに食べるとその辛さがすぐになくなります。イスラエル人が煉瓦を積み上げながら苦しんでいたけれども、その苦しみは神の救いによって甘さに変わるというものです。この時に、ヨハネ 13 章によるとイスカリオテのユダが、去っていきます。そしてこの後に、子羊を食べます。このメインコースを食べます。その後の話が、ここ 22 節です。アフィコーメンの隠していたものを探して、それを小さく割って、それぞれが食べます。イエス様が葬られた体を表していて、それを食べることになります。

イエス様が「神をほめたたえてこれを裂き」とあります。五千人の給食でもそうでしたが、神をほめたたえて分け与えるのは、これが神から与えられた食べ物であることを示すものです。そして裂かれた時に、イエス様はこれまで出エジプトを記念する過越に新たな意味を付けました、「これはわたしのからだです」と。イエス様が、鞭打たれて打ち傷を受け、また手や足に釘を刺され、体が裂かれたことを覚えるのですが、食べるという行為によって、それが客観的なものではなく、まさに自分自身の一部になるということ、自分のものになるということです。概念では分かるけれども、これは私のことではないというのであれば、まだ救われていないと言えるでしょう。食べるのですから、もうそれが自分のものだということです。映画「パッション」の監督であるメル・ギブソンは、唯一、その映画の中で登場したところがあります。ローマ兵がイエス様を十字架に釘づけにする時に、釘を握っているその手は、メル・ギブソンの手でありました。彼はそうやって、キリストを釘付けにしたのは、この私の罪なのだということを告白したのです。パンを食べるということは、このようにして

イエス様のからだを自分のものとして覚えるものです。

23 また、杯を取り、感謝の祈りをささげた後、彼らにお与えになった。彼らはみなその杯から飲んだ。24 イエスは彼らに言われた。「これは、多くの人のために流される、わたしの契約の血です。

これが先に話した、第三の杯、贖いの杯です。イエス様はその贖いを、ご自分の流される血によって成し遂げられることを意味されました。ここの箇所を注意してみると、彼らが杯から飲んでから、イエス様がその杯の意味を説明されたようです。聖餐式ではその反対ですが、順番が大事なのではなく、意味を知ることが大事ですね。意味は、「多くの人のために流される、わたしの契約の血です。」であります。

その契約とは何を持ってなのか？と言いますと、エレミヤがかつて預言した新しい契約です(31:31-34)。そこに、「わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」とありますこのように、罪の赦しを約束するところの新しい契約です。そして律法が心に置かれるという約束もあります。それは、イエス様が復活された後に聖霊が与えられることによって実現します。

なぜ、血が流されなければいけないのか？レビ記には、「17:11 肉のいのちは血の中にある。」とあります。罪を犯せば、死ななければならぬことは、主がアダムに言われたことでした。そしてエゼキエル書にも、罪を犯した魂は死ぬと書かれています。しかし、それゆえに代わりに血を流す存在があって、それで罪を赦すということによって、人が神のところに帰り、その命に再びあずかることができるのです。そして、

25 まことに、あなたがたに言います。神の国で新しく飲むその日まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは、もはや決してありません。」

イエス様にとって、今の食事が心待ちにしていたのはこれが理由です。弟子たちと共にぶどう酒を手にするのはこれが最後で、次に杯を交わすのは、主が再び戻られて神の国を建てられた後、祝宴を持つ時です。ですから、聖餐式には前回お話ししましたように、再臨の期待も込められています。イエス様が再び地上に戻られるまで、この方の死を告げていくという決意を表明したのもあるのです。そしてイエス様は、その喜びを、まるでぶどうから出たものを一切口に入れないナジル人のように、一定期間、口にせず、ご自身が戻られてから共に食されることとなります。

26 そして、賛美の歌を歌ってから、皆でオリーブ山へ出かけた。

贖いの杯を飲んだ後に、第四の杯、賛美の杯を飲みます。この時に詩篇を歌います。詩篇 113-118 篇までが「ハレル詩篇」と呼ばれますが、これを過越の食事の時に歌います。ここでは、最後

の二篇、117 篇と 118 篇を歌います。その 118 篇に、あの要石の預言がありますね。「118:22 家を建てる者たちが捨てた石それが要の石となった。」これから、家を建てる者たちから、捨てられる石となります。

3A 弟子たちのつまずき 27-31

27 イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたはみな、つまずきます。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散らされる』と書いてあるからです。28 しかしわたしは、よみがえった後、あなたがたより先にガリラヤへ行きます。」

イエス様は、イスカリオテのユダがいなくなった後、残りの弟子たちに対して、「あなたがたはみな、つまずきます」と言われました。ユダの次は、彼ら自身だったのです。しかし、ここでイエス様が、ある意味で「余裕のある」発言をされています。一つは、つまずきでさえ主がご存じで、織り込み済みであるということです。「わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散らされる」とのことですが、これはゼカリヤ書 13 章 7 節からの引用ですが、羊が散らされるのは羊飼いが打たれるからであり、その羊飼いを打っているのは、他でもない神ご自身なのです。神が羊飼いでられるイエスを打たれ、イエスが打たれるから、弟子たちが散っていくのです。彼らはこれから躓きます。とてつもない信仰の試みを受けます。しかし、ここは通らないといけない試みです。自分たちの信仰が、自分たちの頑張りや努力で神につながるものではなく、もっぱら神によって支えられる、神の恵みと憐れみによって支えられる信仰に変わらないといけないのです。

そして、その保証を与えるかのように、イエス様は「しかしわたしは、よみがえった後、あなたがたより先にガリラヤへ行きます。」と言われます。散っていった弟子たちは、甦られたイエス様とガリラヤで会うことになっているということです。つまり、彼らの信仰は回復する、立ち直ることができるということです。ここまで織り込み済みなのですね。ですから、私たちは希望を持てます。私たちに起こる、いろいろな躓きがあります。信仰を後退させてしまうような出来事や試練が起こります。けれども、それらを行っているのは紛れもなく、神ご自身なのです。神がそれらのことを積極的にお許しになっているのです。ですから、そこで私たちの信仰が練られて、清められて、神にのみ拠り頼む信仰へと成長していくのです。

29 すると、ペテロがイエスに言った。「たとえ皆がつまずいても、私はつまずきません。」30 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに言います。まさに今夜、鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います。」31 ペテロは力を込めて言い張った。「たとえ、ご一緒に死ななければならぬとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」皆も同じように言った。

ペテロや弟子たちの問題は、私たちの問題でもあります。何が問題か？それは、「神のご計画の全体を見ていない」ということです。イエス様が打たれてしまうということを聞いて、それに強く反応

して、反発しています。そもそもの神のご計画は、この方が死なれて、そして神が、よみがらせてくださるというものです。その過程で彼らも、イエス様に躓いてしまって逃げてしまうという失敗も含まれます。しかし、神はそうした失敗もご存じで、予め彼らをイエスの使徒たちとして選び、定めておられました。そして彼らが神の恵みを宣べ伝える使徒とするために、罪人であるのに、それでも救い出された者であるということを証言するために、立てられているのです。

しかし弟子たちは、自意識が強くなっていました。先に、だれか一人が裏切りますと言われた時に、一人一人が「私なのですか」と反応していました。そして今ここでは、イエス様がせっかく、ガラヤで会うと言われているのに、「私は絶対に見捨てることはしません！」と反発しているのです。神の恵みの中に抱かれているのに、その選びによってこれまで生きてきたのに、いきなり自分に意識を集中させて、あたかも自分に何か力があるかのようにみなしてしまったのです。しかし、イエス様が言われましたね、「ヨハ 15:5 わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」自分には、何もする力がないのです。ですから、命を捨てると言い張っているペテロは、その夜が明けるまでに、鶏が鳴くまでに、一度ならず二度、いや三度、つまり意志をもって、はっきりとイエス様を知らないというのです。

ここで考えましょう、私たちの問題は私たちの内に力がないということではないのです。イエス様が語られた言葉、その言葉にあるご計画を受けいれていないということなのです。そして、どんなことがあっても神が支配しておられ、神は慈しみ深い方であられ、必ず良きに計らってくださるということなのです。イエス様は見捨てられました。しかし、それは身代わりに見捨てられたのであり、私たちは決して見捨てられることはないことを保障するものなのです。イエス様は、最も近い者たちに裏切られるというスキャンダル、そしてキリスト教がその見捨てた者たちによって始まったという衝撃的な事実。しかし、それは神の愛がどれだけ、私たちを何物からも引き離さないのかを物語っています。

パウロがロマ 8 章でこう言いました、「8:35-39 だれが、私たちをキリストの愛から引き離すのですか。苦難ですか、苦悩ですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。こう書かれています。「あなたのために、私たちは休みなく殺され、屠られる羊と見なされています。」しかし、これらすべてにおいても、私たちを愛してくださった方によって、私たちは圧倒的な勝利者です。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、今あるものも、後に来るものも、力あるものも、高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」